

第5回（平成24年度第3回）札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

24.7.10 札幌文化芸術円卓会議事務局

【伏島委員長】

第5回の文化芸術円卓会議を始めたい。事務局から報告がある。

【事務局】

円卓会議に関連して、文化部の中の動きについて情報提供させていただきたい。

平成19年4月に、札幌市文化芸術振興条例が出来た。その条例の中に、文化振興の目標、基本的な方針を盛り込んだ、基本計画をつくるという規定がある。

その規定に基づき、平成19年度と20年度、2カ年をかけて、文化芸術基本計画をつくった。この計画は、5カ年の計画なので、平成25年度で計画期間を満了する。それにもない、平成19年度と同様に、平成26年度から始まる次期基本計画について、2カ年をかけて現計画を見直し、検討しようと考えている。

検討にあたっては、学識経験者に、公募による市民委員を加えた検討委員会を設置して、検討を深めて行きたいと考えている。

新委員の公募については、広報さっぽろ4月号や文化部のホームページで募集案内を行い、今まさに公募の真っ最中である。その他、学識経験者、文化芸術の実践者についても、今人選の途中である。早ければ、8月から、次期基本計画について検討していきたいと考えている。また、仕組みの中に、まさにこの場である、文化芸術円卓会議という学識経験者、文化芸術の実践者の自由な意見交換の場があるので、円卓会議の意見についても、基本計画の検討の中に組み入れていきたいと考えている。あと3回の会議でまとめることになる円卓会議の意見を盛り込む形で検討していきたいと考えている。今後いろいろな関係が出てくると思うので、随時報告させていただきながら、基本計画の検討を進めていきたいと考えている。

【伏島委員長】

もう1つ、2つ報告がある。

【事務局】

資料の、「(仮称)アートセンターについて」から説明させていただきたい。前回から、この円卓会議の議論が、アートセンターに深く入って来た。前回

も多少は説明したのだが、平成 21 年に、アートセンターの検討委員会を立ち上げ、2 年間にわたって検討を進めていただき、平成 23 年に提言書をいただいた。その提言の内容を簡単にまとめたものが、この資料だ。まず、これを説明したい。

「アートセンターの目指すものは、アートの持つ創造性をまちづくりに生かし、札幌をアートの香りのするまちとし、誇りを持って世界に発信できるまちとする。」こと。このようなアートセンターを実現するために、3 つの役割、さらに 4 つの機能に分けている。

この 3 つの役割は、まず「文化芸術の裾野を広げると同時に、札幌の文化芸術の「頂点」を引き上げる」こと、「札幌固有の文化芸術資産を有機的につなぐことで、さっぽろテイストあふれる新たな価値を創造する」こと、「つくり手と受け手の新しい関係をつくり、さっぽろの創造性を高める」ということだ。

その役割を実現するために、4 つの機能ということで、ひとつめには、「マネジメント機能」、協働のマネジメントは、いろいろなジャンルの協働によって、優れた文化芸術表現の発信をしていくこと。資源活用のマネジメント、そして、円卓会議の中でも道内各地との連携ということが言われていたが、広域連携のマネジメント、文化芸術と、産業、観光、教育、福祉等さまざまな施策との融合を目指した、いわゆる創造都市への取組ということ。

次に、人材の創出機能ということで、この円卓会議の中でも再三言及されているが、マネジメント能力のある人材を創出していこうということ。

そして、芸術のつくり手、おくり手、うけ手の支援、サポート機能ということで、コンサルティングサポート、経済的サポート、ネットワークを形成するサポートが盛り込まれている。そして最後に、政策研究機能、例えば、札幌市の事業評価のしくみが文化芸術事業の評価のしくみとしてどうなのかということがあるので、事業評価への言及もアートセンターの役割として盛り込まれている。

次に「アーツ千代田 3331」について説明したい。

この円卓会議でも参考事例の一つとして「アーツ千代田 3331」が取り上げられていた。視察の機会を得て、東京に出張してきたので、その内容を報告したい。

お話をうかがったのは、千代田区の担当職員の方と、このアーツ千代田を運営している合同会社コマンド A の社員の方。

アーツ千代田は、廃校になった練成中学校の校舎を利用したもの。

千代田区も札幌市と同じように、文化芸術振興条例を制定し、それにもと

づく文化芸術プランを策定した。その文化芸術プランの重点プロジェクトとして、区民の文化芸術活動を推進する、そして多様な文化芸術の担い手を育成するための新たな拠点施設として、千代田アートスクエアについて検討を重ねた結果、それを旧練成中学校の校舎を利用して設置することにした。運営団体をプロポーザル方式で公募した結果、合同会社コマンド A が選ばれた。

このコマンド A は東京芸術大学絵画科の中村政人准教授が代表。主に、芸術家の方々の会社で、コミュニティアートが中心とのこと。

廃校なので、エレベーターもついていなかったもので、エレベーターを付けるなどの施設全体の改修工事は、区が2億円かけて行った。内装工事については、運営団体がすべて請け負った。これが点おもしろいと思った。

通常の学校の入口とは反対側に公園があるのだが、そちらを入口とし、公園と一体的に整備し、公園とつながる開放的な空間とした。

通常、公共施設の運営は、指定管理者を置き、指定管理料を支払って行うことが多い。この施設の場合は、千代田区が、建物をコマンド A に有料で貸し付けを行っている。施設の中で行う事業については、コマンド A が一切引き受けている。その事業費については、区はお金を出していない。区は、障害者のアート事業とアーティスト・イン・レジデンス事業を委託しており、委託料を支払っているのみである。そのほか、自主事業に対する補助金を出していない。

そこで、コマンド A は、たえず展覧会事業を企画して、運営費を賄っている。運営の特徴としては、アーティスト自身が運営しているということ。これによって、予算は少なくとも良いものができる。

一階にかなり広いメインギャラリーがあるが、年間半分くらいは自主事業で埋めている。後の半分は他の団体に貸している。私達がいったときには、ちょうど「AKB48 美術部」の展覧会を行っていた。それを目当てに行ったわけではないが、残念ながら観ることはできなかった。すごい数の客がいて、時間制限付きのチケットを持っていた。大変な人気だった。この一つ前には、大友克洋の展覧会も行っていた。コマンド A としては、これらのようなメジャー系の展覧会が来るとは正直思っていなかったのだが、地道な努力が評価されたのではないかと感じていると話していた。

メインギャラリーのほかに、3331 ギャラリーがあり、ここでは年間 10 人くらいの若手のアーティストを紹介している。アーティストによっては、作品に、値段を付けたがらないアーティストもいるが、なるべく値段を付けていただいて、観た人が気に入ったものは買えるようにしている。

このほか、ボックスギャラリーというものもある。ボックスの一つ一つをアーティストに貸し出しており、アーティストは自分の作品をそこに置いて

において、売れば何割かはアーツ千代田に支払う。そのような工夫もしている。

2階3階は、レンタルギャラリーとなっている。

GEISAIのギャラリーもアーツ千代田に入ってきている。

オフィスも貸し出している。これは、デザインやメディアアートなど相互に連携できる団体へ貸し出している。アーティストと企業が相互にメリットを感じ、顔を合わせる出会いの場にもなっていて、仕事が発生することもある。

いらなくなったおもちゃを交換するプロジェクト「かえるステーション」もある。ここで子どもを遊ばせておいて、お母さん方も少しゆっくりして作品を観ることができる。託児施設ではないので保母さんがいるわけではないが、遊ばせる場所も用意している。

それから、ハンダ付けカフェ。ハンダ付けによる作品作りを体験しながらコミュニケーションをはかっていく。これは、単に買うとか観るということではなくて、いっしょに楽しむ、身近に参加するということである。

千代田区からの委託事業として、障害者のアート事業も行っている。これは、テナントとして入っているNPO法人の、エイブルアートジャパンとは別の事業で、障害を持つ人も、持たない人もいっしょに公募展を行っている。アーティスト・イン・レジデンス事業は、アジアからのアーティストに重点を置いたレジデンス事業を行っている。このアーツ千代田3331には宿泊施設はないので、歩いて2分くらいのところにマンションを借りているとのこと。

作品を作ってもらおうということだけではなく、日常的な付き合いも行っている。

廃校のリニューアルの良いところは、かなり自由に改装できること。アーティストが行っているので、かなりこだわった改装ができる。ギャラリーの展示パネルも全部自分たちで作ってしまう。

ちなみに3331という名前は、333で九ができて、それに1を加えることによって丸く収めるという江戸一本締め由来している。

大変参考になる施設だと思った。

もう一カ所、横浜市の創造都市センターへ行き、アーツコミッションヨコハマの説明を聞いてきた。

横浜市では、みなと未来地区の再開発を行った。そのため、旧市街地の関内、山下地区に空きビルがどんどんできて、地盤沈下を起こしてしまった。そこを、芸術文化の力を使ってなんとかしようと考えた。もっと端的に言うと、クリエイターやアーティストを集めて、創造限界ができないかということ

とを考えた。

そのためには、いろいろなことを相談できる場所が必要だろうということで、アーツコミッションという機関をつくった。

芸術文化に関することであれば、困ったことは何でも相談に乗るという機関だ。直接支援するわけではなく、コンサルタントとかコーディネーションを行う、中間支援施設である。

相談件数は、年間 120 件程度。相談を受けることによって、アーツコミッション側も何が求められているのか、ニーズを把握することもできる。

空きビルの再利用という点では、芸術不動産という名のもとに、空きビルを芸術家のアトリエなどの活動場所としてリノベーションし、使っていくという事業も行っている。その場所に事務所を開設するための助成とか、クリエイターやアーティストに空きビルを使わせたいオーナーを支援する助成も行っている。

このほか、アーツコミッションでは、先駆的芸術活動への助成とか、都市文化創造活動への助成制度も持っている。助成制度の評価については、アーツコミッションでもどうするか研究しており、平成 24 年度から新たな評価制度を実践していくことにしている。また、助成対象については、書類審査で決定しており、具体的なプレゼンを行った上で決定するところまでは行っていないということ。

報告は以上にさせていただきたい。

【伏島委員長】

荒川委員からのペーパーについて紹介してほしい。

【事務局】

荒川委員が御欠席ということでペーパーをいただいている。

アートセンターがもたらす行政と市民とアーティストのそれぞれのメリットについて、アーティストにとっては、活躍の場や情報発信ができる。市民も足を運ぶ機会ができるということだ。

そして、アーティストが求めることは活動の場と公演の集客、活動の周知であり、市民が求めることは、優れた文化・芸術に触れることと市内の文化・芸術の情報を得ることだと考えたということ。

アートセンターに人が集い、そこから人材や情報が発信されることによって、アートセンターが文化・芸術の拠点となれば良いというご意見だ。

そして、練習場所が不足しているので、アートセンターは練習もできるような施設であって欲しいという具体的な意見、情報が集まってくるので、ア

ートセンターへ行けば、常に新しい情報が得られる、それが、チラシやインターネット情報だけではなく、実際に目に見える形での市民へのアピールもあればという具体的な御提言もいただいた。

【伏島委員長】

裏方体験であるとか、見本市やロビコンなど実際に目に見える形ということが、印象に残った。

本家さんも御意見、御感想をペーパーにまとめていただいている。

【本家委員】

ペーパーに付け加えるとしたら、人材の育成のところ。プロはこれくらい知っていて当たり前だろうというところがあると思う。しかし、何も知らない人からすると、それも難しいところがあると思うので、市民目線で、このようなものが良いのだけれどと言われたときに、色々なジャンルを横断できるコーディネーターといっしょだと思うが、広い目線で、このようなものが良いのではないかと勧めることができる人がいたらよいなと思う。

荒川委員のように、裏方体験に小学生から参加できるようなことがあれば、もっともっと、小さいころから芸術に興味を持ってくれる子が増えるのかなと思う。

あったら良いと思うものとして、レストランやカフェと書いたが、例えば北海道近代美術館で、ダリ展のときには2階のレストランでスペイン料理を出していたり、セザンヌ展のときには、アップルパイを出していたことがあった。そういうものがあると、普段は食べないけれど、そういうときだから食べてみようということもあると思う。メイクやマネキュアも、インターンの子が500円で行うとか、それをきっかけに通ってもらえるような場所になれば良いと思った。

【伏島委員長】

前回から、アートセンターという、言わば例題に本格的に取り組み始めた。

さきほど、事務局から説明のあったアートセンターに関する公式のレポートを縦糸としてみると、いろいろなことが見えてくる。必要なことは、アートセンター検討委員会の提言でかなり読みとることができる。ここに付け足すことは余りないだろうとさえ思える。しかし、それを本当に分かっているかといえ、イメージのわからないところがある。その点で、我々の円卓会議の議論は、どうやら横糸になるものではないか。市民の目線で、ビビットに目に見える形にしたいというのが、多分我々の心の奥底にあって、それが荒

川さんの御意見とか、本家さんの御意見にも登場してくるのではないかという気がする。

縦糸は意識しながら、肉付けして行って、絶えず目に見える形をイメージしていくのが、円卓会議が市民から期待されていることだと思う。

遠くない将来に、北1西1に大きな施設ができて、その一角にアートセンターができて、実に生き生きとした活動がなされていく。その根っこの議論ができれば、遠くない将来の市民生活へ向けて、貢献できるのではないかと感じている。

そこで、こう欲しい、こうありたいというところを、これからみなさんにもお話ししていただきたい。さきほど、事務局から報告のあったアーツ千代田になぜ注目するかと言うと、これは非常に優れた一つの解だと思っている。本当は現地へ行って議論したいがそうもいかないのも、機会を観て他の事例についても勉強していきたい。

前回の宿題について、既存の芸術文化財団など、優れたソフト・ハードとアートセンターはどうかかわっていくのか。実状と文化部の考え方を聞きたい。

【事務局】

アートセンターと芸術文化財団との関係は、実はまだきちんと整理しきれていない。アートセンターの運営を誰が行うのかについては、まだ検討中だ。ただ、財団が札幌市の芸術文化施策、事業の中核を担っていることには変わりはないので、何の関係も生じないことはあり得ない。今芸術文化財団は、芸術の森、キタラ、教育文化会館、市民ギャラリー、彫刻美術館といった施設の管理運営を行って、いろいろな事業も行っている事業団体である。そのような財団の性格がこれからどう変わっていくのかということも含めて、アートセンターとの関わりについて検討していかなければならないと考えている。検討の緒についた段階だ。

【伏島委員長】

ということは、検討の材料はいろいろあった方がよいということだ。円卓会議、文化芸術基本計画の見直しの議論も活かしながら、財団はどのように対応すべきかが、より明らかになって来る。同時並行的な双方向的な検討と理解すればよい。

アートセンターを誰が、どのようなお金で運営するかということは、まったくこれからと理解してよいか。

【事務局】

提言の中では、札幌市の直営や、既存の財団が運営するのとは異なった形を考えるべきではないかという考え方が示されているが、それについてはまだ検討段階だ。

【本家委員】

基本計画の議論と、円卓会議の議論とは論点がどのように違うのか。

【事務局】

基本計画は、札幌市の文化芸術全般に関する議論となる。

【本家委員】

その中に、アートセンターも含まれるのか。

【事務局】

アートセンターは、基本計画の中でも重要な部分を占めると思う。

【伏島委員長】

今日の議論の中で、アーツカウンシルを取り上げたい。イギリスがトップランナーとして行っているわけだが、要するにいろいろなことを評議する機関だ。一番のポイントは、そこが市役所のような公的な行政機関に從属しているのではなくて、腕の長さ、離れたところに置かれている。つまりお金やいろいろな点で行政と関係は深いのだが、一応独立している。ここが非常に難しい。完全独立しようという考えもあれば、大阪市のように、市長が関与するのだということもあり、今非常に動いている。要するに、これまであいまいだったところをきちんと表に出して、みんなで評議していこうということ。お金のことも事業評価もきちんとしていこう。世間のいう事業評価ではない。いろいろな創造的なことをやっいていこうというアーツカウンシルもある。定義はあるようでない。いろいろ選べる。札幌型のアーツカウンシルを行おうとすれば、いくらでも設計できる。

東京都は今年、大阪市は来年予定している。東京都は、今4人の職員を募集している。募集の主体は、実は東京都歴史文化財団だ。東京都歴史文化財団は、アーカイブをアーツ千代田に設けているようだが、東京のアーツカウンシルは、アーツ千代田に来るのだろうか。

【事務局】

そのような視点で、お話しをうかがったのではないので分からないが、観た感じでは、千代田にカウンシルは置かないのではないかと思う。

【伏島委員長】

アーツカウンシルは札幌も無縁ではない。アートセンターが札幌版のアーツカウンシルの機能を持つとすれば、あるいは持つべきであるとすれば、どのようにやったらよいのだろうか。ちょっと硬い話だが、そんなことも我々は無関心ではられない。みなさん、少し勉強していただきたいと思う。幸いなことにインターネットから、かなり良い議事録がどんどん出てくる。識者の分かりやすい資料も取りだすことができる。

ここから、アートセンターについて、みなさんから、かくあって欲しいというお話をうかがいたい。本家さんからは美味しいものも食べられるようなところのお話があった。アーツ千代田にも入ってすぐ右のところにカフェがある。実際に食べてみたが美味しかった。お客さんにきてもらうための敷居の低さと言う意味では、札幌の場合、食べる飲むという行為はばかにはできない。ご要望、御意見をうかがっていききたい。

【事務局】

アートカウンシルに関係するという点では、芸術文化基本計画の中に、アート評議会についての記述がある。アート評議会は、アートセンターの上部組織と位置付けられている。音楽、美術、演劇、メディアアートなどさまざまな分野のアーティストをはじめ、市民、企業、学識経験者等で構成されるアート評議会を設置して、アートセンターの運営方針の決定とか、文化行政全般に対する評価や提言を行うことを想定し、検討を進めることにしている。

また、文化庁は、アートカウンシルを芸術評議会と訳している。

委員長がおっしゃるように、イギリスでアートカウンシルというと、一番の中心的機能は助成金をどうするかということだ。それをさまざまな芸術分野の専門家が集まって、助成金の配分について決める。そして、配分した結果、助成金が効果を上げたのかについて、事業評価していく。そこが非常に重要だということだ。その機能をイギリスのアートカウンシルは持っている。

文化庁がこれを試行的に、助成金について行っている。新しい制度は、例えば補助金の出し方も、今まで制作人件費は認めなかったのだが、それを認めるとか、今までの赤字補てんの考え方の枠を外しているとか、今までの補助金にはないやり方を導入してきている。それは、今までにない新しい動きだと思う。

イギリスでは、何百億という予算をアートカウンシルが持っている、それを分配するわけだが、日本の場合はそこまでまだ行っていない。大阪市や東京都もはじめるようであるが、それに近い形ができるまでには時間がかかるだろう。

また、アートカウンシルは助成金の分配と事業評価だけを行うところではなく、そのほかのアウトリーチとか、いろいろな文化施策もそこで検討していく。その辺のところは、日本でもやっていけるのかなと思っている。

大阪や東京の動きを注目していきたい。新しくアートセンターができるまでには、まだ時間があるので、東京、大阪、その他の動きをみながら、札幌でもアートセンターができたときに、アートカウンシルを考えて行かなければならないと考えている。

【伏島委員長】

アートセンターの上位機関としてのアーツカウンシルというお話しがあったが、アーツカウンシルをどうするかということと、アートセンターをどうするかということはコインの裏表の関係にあるので、アーツカウンシルとセットにしてアートセンターについて考えて行く。上、下で分ける必要はないので、自由に御発言いただきたい。

市民の目線からは、アーツカウンシル的なものは、特にお金の面で、必要性が議論されると思う。例えば、助成金の話があったが、単発の助成だけではなくて、今ある札幌市の芸術文化的な事業に関する出資の状況が適切なのか、効果があるのかということと、例えばPMF、あるいは今度はじまるトリエンナーレ、その他いろいろある。そういったものを、包括的に、公的に、かつオープンな形で、評価をしている機関があるようでない。

例えば、ちえりあの所管は市長部局ではなく、教育委員会だ。しかし、市民から見れば、同じ文化関係のハードでありソフトだ。裂け目を生じてはいけけない。やはり市民の税金が関与しているのであれば、わけへだてなく、包括的に評価しなければいけない。

そのような点で、大胆に踏み込むところがあるのであれば、大胆に踏み込んでいって良いと思っている。

斎藤さん、先ほど助成の話があった。あなたに関係している世界も、大いに助成と関係している、特に文化庁のお金でかなり左右される現実がある。

これは、地方公共団体の助成についても当てはまる。演劇世界で、助成の在り方、分配の在り方、どう自らをチェックしていくか。

【斎藤委員】

昨日、ちょうどニセコでお百姓さんに、演劇のチケットの値段はどうやってきまるのかと聞かれた。今度ニセコで「亀もしくは」という、札幌で3,000円で観せたお芝居を、500円でやらなければならない。それは、町長ができればただにしたいというのを、なんとか、100円でも200円でもお金をとる形にしたかった。それで、500円という値段を見た時に、以前僕の芝居を観てくれたお客さんが、なんてぜいたくなんだろう、500円であのお芝居が見れるなんてと思ったので、そういうことを僕に聞いたのだと思う。だけど、500円のお客さん1,000人来てもらっても、ちょっと赤字だ。

シアターZOOでは、お客さんから一万円とらないと成立しないようなことをやっている。その分、どこからお金がでていいのかと言ったら、相当な部分補助金に頼っているという現状がある。

今までは、芸術文化振興基金の助成で、予算を組んだら赤字が出るので、その赤字の半分を助成しろと申請していた。しかしそれは変だ、こっちのお金を用意できないじゃないかという話があったりして、稽古期間の費用に対して補助しようという考え方になったらしい。そのかわり、本番中に発生する人件費については、お客さんからの入場料でまかないなさいと。そこで、今演劇の世界で混乱が起きている、稽古一日当たりの日当をいくらにすればよいのか、基準を決めようかという話になっている。

芸術文化振興基金は、プログラムディレクターとプログラムオフィサーという立場の人を、今年から、演劇の分野にも置いた。その4人の方、全員が演劇のプロデューサーだったり、批評家だったりするのだが、その人たちの話を聞く機会があった。彼らが、芸術文化振興基金から1年間、週3回の勤務で成し遂げてくれと言われている仕事は何かと言うと、評価の基準をつくるということだ。専門委員の方は助成金の評価をするのだが、専門委員によってもいろいろ変わる、それが良いのか悪いのかということなしに、評価の基準みたいなものを作ってくれと言われて、今それに取り組んでいて、まだ1カ月、2カ月だ。その話を聞いているとき、演劇人から、そんなことをしているのではなく、評価の全体、理念そのものを、もっと監視するのがディレクターもしくはオフィサーなのではないかという意見が結構でていた。助成のシステムそのものをディレクトする、そういうことを提言できるのがディレクターではないのか、という話がでたのだが、委員も演劇人でそれを吊るし上げるわけにもいかないの、まだ始まったばかりなので、もう少し頑張らせてくれという話になって、そうだね、頑張ると言うしかなかった。

演劇人が助成金をもらいはじめて、まだ20年くらいしかたっていない。もらいかたと言ったら変だが、われわれの中でももらった者得で、もらえな

かった者が損するみたいな話ばかりだったのだが、どう有効にこの国のお金を使うべきかという議論のような、そうじゃない根本的な話をした方が良いのではないか、この国の演劇の将来とか、演劇だけではなくて文化全体のために、そういうお金を財政が厳しい中で何とか作ろうとしてる人たちがいるとしたら、どういうところに投下すればよいのか根本的に考える人たちみたいな、そういう議論の場が必要なのではないかという話になっているのではないか。

アートセンターというものについて、演劇人として座って話を聞いているのだが、予算は限られているし、それを何に使うのか決めるのがアーツカウンシルなのか。イギリスのアーツカウンシルの場合、助成金の分配、事業評価、確かにやっている仕事は、与えられたお金をどう分配するのかについて議論するのだろうが、助成制度そのものの自体の性格、理念みたいなものをきちんと議論する、それをどこに預けるべきかを議論する場が必要なのではないか。上から、この助成金を渡すから、どう分配するのか判断してということだけを頼まれるのは、アーツカウンシルではないような気がする。そうじゃなくて、もうちょっと、逆に言うと、「いらねえそんなもの」と言うのか、さきほどの千代田区の例でいうと、こんな時代に芸術にお金を出すべきではない、それは僕らで生み出しますというのか。そういう議論がある場所みたいなもの。助成金の使われ方が的確なのか見張っている場所だとすると、アートではないような気がする。

【事務局】

行政でも、かつて経済が右肩上がりの時代には、予算を執行して、それきりだった。ところが、今から14、15年前から、事業評価が始まり、今も毎年行っている。

これだけの事業を行って、どれだけの効果を出したのか、予算を立てる時に、数値目標を決める、この事業を行ったら、どれだけの観客を増やしたとか、そのような数値目標を決めている。

評価をしなければ、予算が有効に使われたのか、事業の質も分からない。限られた予算を、どのように有効に使うかが非常に重要になって来る。

それを芸術にあてはめてみると、助成金が適切に使われているかどうかを監視するというのではなくて、アートカウンシルの言っていることは、真に助成するに値する価値のあるものを選ぶということだと思う。助成金をどの芸術、どの団体に分配することが、もっとも効率的か。今まで、助成金はある意味ではやりっぱなしだった。事業報告はもらうが、その事業がどのような効果を上げたのかは全然問わない。それではまずいのではないかという

ことだ。真に助成する価値のあるものに助成しなければならない。それを選ぶということだと思う。専門家が集まって、まずは選んで、実際にその効果を検証して、やってみたが、あまり芸術性が高くないとすれば次回は助成金を与えるには適さない、ある意味では厳しい競争、質を求めるということだ。

今までは、お金をもらって終わりだったのだが、そうではなくて、真にそれに応える成果をあげなかったら、それに対しては次は助成しない。芸術の質を高めるために事業評価をするということなのだと思う。

アートカウンスルの中に専門家がいる、専門家がどこに分配したらよいかよく考えてあげて、基準をつくって、厳密に検証していく、それによって芸術の質も上がっていくということなのだと思う。

【伏島委員長】

斎藤さんが、貴重な意見をのべて、事務局がそれを受け止めた。この点はこのまま流して、伊藤副委員長の意見をききたい。

【伊藤副委員長】

前回、各ジャンルの芸術家の連絡会のようなものを作ればよいと話したが、アートカウンスルでメインになる人たちの専門性は、割と大づかみで良いと思っている。

むしろ、助成金を与えたりすることに関しては、より細分化された各専門家へのアウトソーシングでよいと思っている。

学術経験者等として広く社会的信頼性を持つ5人、6人の専門家というのは、ある種の団体の既得権益を持たざるを得ない人たちであったり、「現場」としては賞味期限が切れてしまった人たちがほとんどになる可能性が高い。だから、余り細かいことは決めさせないで、おおざっぱに文化施策の方向を決めてもらう。助成金事業については、別の責任ある機関や評価担当者を入れて、英米の助成金制度と同じで、完全にオープンにすればよいだけだと思う。アートカウンスルの方向性に合わせ、助成金を決定する人にどのような人を充てるのか、その当て方のシステムをきちんと作るということが重要だと思う。

大阪とか、東京がアートカウンスルを作る理由は、オリンピックへの対策が大きいのではないか。前回の誘致の際も、芸術文化財団に予算をつけて、各美術館に3000万円くらい予算をつけて、文化性をアピールしていた。それでも誘致を逃してしまったことが大きく、その反省として、文化を組織やプログラムという「眼に見える」形に位置付ける必要が大きいと考えたのかなと言う気がする。そのノウハウを、そのままずーんと札幌に落とせるか

という、象徴的な事業が今札幌にはないので、ちょっと違うのかなと言う気はする。

後は、委員長がお話しされたと思うが、アートカウンシルを作ったときに、教育委員会だとか芸術文化財団とかとの関係がある。

アートカウンシルは、芸術文化の部局の一部でつくるのだろうが、最終的には部局外と連携するというのではなく、アートカウンシルが市長と一緒に方向を決めて、その下で全部局が連動して動くという形にしないと、効果はばらばらで限定的になって来る気がする。それが決まってくれば、助成金に関しても重点が決まって来る。例えば、これから5年は裾野を広げて行く、これから5年は中味のレベルを上げて行くというように、その枠組みが必要だと思う。

あとは、少し話がずれるのだが、本来は市長の仕事なのだろうが、逆に「名誉職」としてのアートカウンシルのトップの人たちには、お金を集めてもらう仕事を付加するべきだと思っている。

例えば、シカゴのアートインスティテュートの館長の仕事は何かというと、政治家や財界の人とご飯を食べてあげることだ。会ってもらって凝った話をしてもらって「名誉（ステイタス）」を受け、企業がお金を美術館に出す。

現状の道や市の美術館の館長は、パートタイムの人か、あるいは教育委員会の天下りで、社会科や他教科出身だったりする。プロパーは副館長で終わりだ。それでは全然尊敬されない。

システム全体のクレダビリティを上げないといけないという気がする。今の一番の問題は、素人ばかり、あるいはプロだという人がアカデミックな専門家であり、今必要な施策について知らないことが大きい。そこが一番重要な気がする。ただ、偶然でも良い人をあてればしばらくは動くが、どうにか偶然待ちではなくて、ニーズの合った人を入れるようなシステムを作っていく必要がある。

【事務局】

イギリスのアートカウンシルの場合は、もともと、第二次大戦のときに、ヒトラーが芸術に介入したので、芸術に政治が介入しないようにということで、一定の距離を離すことにしたということだ。つまりアートカウンシルというのは、行政の中にあるのではなく、行政の外にある。助成金の審査も外の人が行う。それが原則らしい。今の日本ではそうはなっていないし、先日、大阪市の橋本市長が、アートカウンシルをつくらと言っていたが、完全に外に出すことが不安だと言っている。日本で、完全独立のアートカウンシルは

なかなか難しい。助成先を選ぶ上でも、芸術性だけで選べるかと言ったら、権威のある人が自分の人的つながりのある人を選んでしまうかもしれない。選考は非常に難しいところがあると思う。

【伊藤副委員長】

美術作家への助成でも、限られた原資の有効利用について問われても、僕には選ぶ自信はない。最新の情報は、漆さんとかの世代や現場が持っているわけで、そのような人たちが持っている情報によって、安い金でも最大限のコストパフォーマンスで回すことができる。現場を知っていて、実際どのくらいのお金が必要か分かっているから、ちゃんと監視しながら、助成先に予算を渡すとかなりうまく回し方をすると思う。デジタル系のアートの場合など、デジタルネイティブに近い若手なら 100 万円で良い結果を出せるかもしれないが、僕らの世代の助成先だと規模が大きい作品になり、500 万とか 1,000 万円なければ無理だと言う話になってしまう場合もある。僕らより 20 年上なら、技術者を入れる必要があり、それで大体代理店に抜かれてしまうことになる。年齢制限つけても良いかなとちょっと思ったのだが。

【伏島委員長】

3 人が良いお話しをしてくれた。私なりに整理すると、斎藤さんが重要なことを言ったのだが、アーツカウンシルは誰かから頼まれて、頼まれたからやりましょうという仕事ではないだろう。

そもそもアーツカウンシルは自分の理念と、体力をもって主体的に行動するものであろう。それもない中で始めれば、分捕り合戦のようなしょうもないところに落ち込んでしまう。

それと、いわゆる事業仕分け的な観点から見ると、経済効果がいくらかとか、全然文化行政のそれと合わないところで評価され、それがあたかも分かりやすい話であるかのようになり通ってしまう。それは非常に不本意な話だ。

そんな簡単な話ではない。もっとよい意味で難しい話であって良い。

しかし、それはなかなか難しいので、前回会議でも恣意的にやって良いという話があった。恣意的ということはものすごく条件が付く話であって、完全にオープンでなければならぬというようなことも、前回整理した。かつ、現場を良く知る人間がやった方が良い。しかし、斎藤さんがおっしゃったように、演劇の世界を見ても、右・左がすぐに分かるわけではない。

そういう何重にもなった難しさがある。

そう簡単に応えの出る話ではないが、しかし、私は札幌方式を追求してい

って良いと思う。完全、100%は絶対できないので、60%でも良い。当然札幌の事情があるので、札幌方式を考えて行って良い。

札幌方式のーツカウンスルのテーブルに何を並べるかを今議論している。市長部局の全部局であるとか、教育委員会であるとか、そんな枠を取り払った取組、前回と今日で、かなりテーブルに上げる事柄は出始めている。

【浅野委員】

市全体の助成金は全体でどのくらいなのか。アートセンターが動いていくにはどのくらいのお金が必要か。

【事務局】

いろいろな補助・助成があるので、すぐには分からないが、PMF や札幌交響楽団への助成等を入れれば、3 億程度だろうか。芸術文化振興助成金は、560 万円くらいだろうか。

【浅野委員】

アーツ千代田のことなど、考えていったときに、お金の動き方がの落差があると思う。東京でなぜ、アーツ千代田が成功しているのか。いろいろな企業があるとか、AKB の話があったが、交渉がしやすいとか、地理的な要因もあるだろう。アートセンターも含めて、札幌に持ってくるときに、どうやったらうまくいくのだろうか。アーツ千代田の場合は、建物と土地は官が提供しているが、後は民間で行っている。

アーツカウンスルは、お金の分配よりもお金を稼ぐ方法を考えて行く。運営するためのマネジメント機能を高めて行かないと、札幌方式は、官からのお金というよりは自活するための、支持組織をつくっていかないとやっていけないのかなと思う。

写真の方の補助金では、基本予算の 2 分の 1 を補助しますという制度では、動ける部分のお金はどこからか自分で見つけてこななければならないということなので、アーツカウンスルが自活できるシステムを作っていくというか、そういう人たちを集めていかないと、組織・建物を作っても立ち行かないだろう。見に来る人の数、どう考えても札幌市の人口は、東京より少ない。人口規模からは、10 分の 1 くらいだとしても、実際に見に来るのは 100 分の 1、1000 分の 1 くらいだろう。

【井出委員】

アートセンターを複合施設の中に置くとか、既存の文化施設とか、PMF や

札幌への補助金等は、札幌の文化だと思うので良いことだと思う。

芸術文化財団の方なのだが、芸術の森、教育文化会館、キタラに下りる補助金の額はかなりの差がある。

先日のキタラのオペラは素晴らしかったと思う。オペラ祭を7年間やってきた中で、あのような形で若い人たちに、あのような舞台を提供して下さったことについては、すごく感謝するのだが、キタラのオペラに関してはかなりのお金が動いているなと思う。それでは、前から活動しているオペラ祭に対する助成金というか、補助金については？の部分がある。その辺の透明さというか、ホールを建てる、アートセンターはつくるという状況の中で、今の活動に札幌市はどのように応援してくれるのかという方向性がちょっとみえないのでは。でも、この間のキタラのオペラを見ると、ありがとうございますという一言なのだが。さっぽろオペラ祭には3団体参加している。札幌オペラ祭がスタートする前は、各団体が札幌市から補助金をいただいていた。

それが、さっぽろオペラ祭がスタートした段階で、教育文化会館へオペラ祭に対する助成金となって、各団体へは一切なくなってしまった。

それで、自分たちの活動についてはやりくりしてやっているのだが。

【事務局】

日本の経済が右肩上がりのときには、予算が潤沢にあったのだが、今予算がなくなって、市の中でも補助金を大幅に整理した。昔は補助金に手をつけなかったのだが、もう出せなくなってきた。

それで、オペラに関しても個別の団体へ補助金を出していくことができないので、まとめて、さっぽろオペラ祭という事業の中でなんとかしてほしい。札幌市としてもやりようがないというか、苦心の中で、そのような形にまとめていったというところがある。

【井出委員】

さっぽろオペラ祭ということで補助していただいているのではなくて、財団へ札幌市が補助しているということだ。その理解はしているのだが、あの、キタラのオペラのような形を見ていると……。

【事務局】

キタラの15周年記念事業として行った。キタラは、札幌市の、ある意味第3セクターなので、市全体のオペラに対する質を上げるために、財団が、キタラがあのような事業を自主事業として組んだ。その中で、若手の歌手を

公募して、登場してもらって、札幌の若手のアーティストを育てて行こうという試みだった。キタラは、札幌のオペラ界を盛り上げるためにいろいろな自主事業を行っている。あるいは、小ホールでアーティストサポートプログラムも行っている。

【井出委員】

キタラも、札幌市の財団だが、教育文化会館も札幌市の財団だ。

【事務局】

すべて札幌芸術文化財団の事業だ。

【伏島委員長】

今の議論は、他の世界にもあると思うが、個別に分かりにくくなっている。前回は申し上げたのは、それを可視化すること。ただ情報をオープンにするだけではなく、それを分かりやすい形で、議論できるような理解できるような形にして、批判する前の作業として可視化する。分かりやすい形にしていかなないと、分からない人がたくさんいると思う。今のキタラと教育文化会館の関係など、それ自体がわからない。札幌方式で分かりやすくするとすれば、担当者が分かっているところを、自分の妻や夫に分からせるつもりで作業してもらおうということではないか。

キタラのオペラも、札幌オペラ祭も上下の関係は全くない。補助金の多寡で、どちらが偉いということは全くない。

PMFも札幌も、もっと可視化しなければならないと思う。分かりやすく提示することは、アートセンターなり、アートカウンスルでは必須の条件となると思う。それがないと、とんでもない市長が出た場合には、一銭も補助しないということにもなりかねない。

【田中委員】

一市民としての視線で言わせてもらおう。アートセンターをつくる基本的なこととして、次世代の方への教育の場というのは絶対的なことだと思う。それをコーディネートできる人と同時に、次世代の人たちに体験できる場というのが大切だ。自分で体験してみなければわからない。5感で自分が分かるということがすごく大事だ。それが子どもたちに波及して行って、自分でやってみようという気になる。

もう一つは、芸術の理解度はあると思うが、演劇にしてもオペラにしても、ミュージカルにしても、東京と比べてしまうと、質の高さと言う意味では、

札幌は少し低いと感じる。でも、だからといって可能性がないということではなく、もっと切磋琢磨して、良いものは良いのだということをきちんと受け入れて、それを次世代に繋げられるようなシステムを、つくるのが大事だと思う。来ました、やりました、終わりましたではなかなか通じない。それを持続できるシステムがすごく大事だ。それは芸術全般に言えることだ。それと同時に、1人の指導者が天狗になってはいけないと思う。もっと謙虚に自分たちも学ぶ姿勢を示すと同時に、子どもたちへもきちっとつなげる人たちを集めて、体験させる。そうすると楽しいという思いが伝わっていくかなと思う。

助成金とは話が違いますが、それがいろいろ見て感じることだ。良いものはたくさんあるのだが、横のつながりが少ない。意外と井の中の蛙で終わってしまっているのが感じるところがある。もっと人を入れるなり、いろいろなものを組み入れて、固定観念に縛られずに、これも良いよねとやれるだけの心の余裕をリーダーの方が持ってもらいたいと思う。

【伏島委員長】

体験メニューそのものも実はばらばらだ。ある演劇の世界、アートの世界、カメラの世界、例えばピンホールカメラなんかすごく面白いと思う。体験してみると。しかし、札幌は幸か不幸か、人口6千人の街ではないので、なかなか見えにくい。

いろいろなメニューを整理・編集する中で見える形にすることと、アートセンターは点のように存在するものではないと思う。常に10区と関係があると思う。わざわざ中央区へ出てこなくても、厚別区で体験できるメニュー。それを含めた可視化だと思う。それが、180万都市としての丁寧な行き方だと思う。

【野田委員】

いろいろなお話を聞いて、まとまってないのだが、アートセンターは組織として市民に開かれたものであってほしいし、建物としても利用しやすいものであってほしい。

何となく足を踏み入れにくいものは嫌だ。どうやったら、気軽に人が入るか。かつ、アートセンターはこのようなものだと周知できるか。アートセンターの人たちが行く、アートセンターで行う、アート関連のイベントがあれば良いと思う。アートソムリエの人たちがイベントを上手く行えるような、ビエンナーレの運営とは違った形での運営がうまく行きそうな中味になっているのではないかと思う。

そのようなイベントが開催されるときに、市民や学生がスタッフとしてかわれるようになっていてうれしいなと思う。

学生スタッフがいるとすれば、アートイベントにかなり興味がある学生が応募し、参加すると思うが、学生としても実際どのような動きとなっているのか知る機会にもなるし、自分はこのようなことを考えている。札幌市のためにこのようなことを行いたいと言い出すきっかけにもなると思う、札幌市側にとっても、今の学生はこうなんだとか、こういうことに興味があるのだなど、お互いに知る機会ともなる。できた際にそのようなイベントがあるといいと思う。

アーツ千代田の公園に入口が面している写真がすごく気に入った。アートセンターにも、内と外の間地点のような部分があると市民も利用しやすい。完全に閉じたオフィスではなく、中間のようなものがあるといいなと思う。

【伏島委員長】

入りやすいということはすごく効果のあることだ。キタラは、慣れている人にとってはなんでもないが、敷居が高いという声も聞く。

【浅野委員】

考えてみると、アートセンターが街のど真ん中にあるということはすごいことだ。どこの街にもそんなのないのではないか。街の中心にあるという意味が大きい。

アーツ千代田は神田なのでそんなに離れていないが、川崎市民ミュージアムはすごく中心部から遠い。そういった意味で、立地は一番の強みだと思う。

【伏島委員】

動線とか、ハード面でも言っていかなければいけない。例えば、カフェがないとか、位置が奥すぎるとか、そういうようなことについても。

【伊藤副委員長】

総工費はどのくらいか。

【事務局】

正確には、まだ分からないが、数 100 億円かかる。

【伊藤副委員長】

水をさすわけではないのだが、音楽に興味がなく、演劇も余り観に行かな

いので、札幌にアートセンターができても行かないのではないかと思う。ギャラリーがあっても、余り行かない。それはなぜかと言うと、個人的に興味がない「興行」、「発表」中心の複合施設になりそうだからだ。同じ理由で「教育文化会館」も「ちえりあ」も、単体の目的以外は行かない。複合施設というのだが、行った人は複合的に楽しめない。

ストックホルムにアートセンターがある。そこには映画館も数件入っている。割と大切だと思っているのは、本屋が二軒くらい入っている。それは、おそらく助成していると思うのだが、詩の本屋さんとか、美術やオペラの本屋さんが入っている。雑貨屋さん、デザインショップやカフェ、託児所なども入っている。そこへ来ると、デザインだったり、本だったりということが楽しめる。だから、演劇を観に来た人が、空いている時間、雑貨を観たり、詩を読んだりしている。堤清二さんが、80年代に池袋の西武でやったことはそういうことだ。

映画を観に行き、結局本を買ってしまうというところがあるのだが、そのような施設は、現在は民業としては大丸百貨店さんとか紀伊国屋書店さんとかがやっているが、結局最後は撤退して、コンピューターの本しかないというようになってくる。札幌中心部では、ここ30年位見ても、そういう文化系の本屋とかレコード屋は成立していない状況だ。そういうものが助成により一緒に入っているとすると、行って楽しいかなという気がする。

カップルがお金なくてもお茶一杯で3時間くらい楽しめた、現代写真を観たとか、ポスターがうまかったので、演劇を観てみたいと思ったというような、そういう複合施設だったらよいと思う。そういう意味でいうと、劇場は必要なのだろうが、何百億使うのだったら、サッポロファクトリーとか、ノルベサを10年位の賃貸で使用しちゃった方がよいのではないか。

また厚生年金会館みたいなものを作っても、しょうがないという気がする。

【事務局】

図書コーナーのようなものは検討している。お店のようなものも、入るかどうかかわからないが、検討はしている。

野田さんがおっしゃっていたが、親しみやすいという意味で言えば、アートソムリエに市民が好みを言って相談できる、適当なものを紹介してくれるとか、市民個人でも親しめるようなものはあった方がよい。

アートボランティア協議会もここに書いてあるが、ボランティアの人たちが集まるとか、アートサロンみたいな、アーティストと市民が交流できるような部分も入れて行きたいなどは思っている。

できるだけ、市民に敷居の高くないようなものにしたい。

【井出委員】

市民の方に、敷居の高くないものにするのは絶対条件だと思うが、その施設に、ニトリ文化ホールクラスのホールができたときに、一般市民がどのくらい使えるだろうか。

【伏島委員長】

それは、市民枠を設けるかという議論にもなる。

【事務局】

ニトリ文化ホールは2,300席ある。ニトリ文化ホールは老朽化しているので、いずれは廃止しなければならない。今、そこで行っているものをどこかで出来るようにしておかなければならない。そのような役割が一つある。

市民の方の活動の場ということ言うと、むしろ、市民ホールということになるのではないか。

【井出委員】

今、ニトリホールでやられているものは、本州から来る演歌の世界とか、興行的貸し館的なものが多い。

【事務局】

興行的には二千席以上ないと、成り立たないようだ。そういうホールが札幌にも一つないと、札幌に、そのような興行が来ないということになる。そのようなホールは必要かなと思っている。

【伏島委員長】

2,300 単独のホールなのか、それとも、例えば、NHK ホールの部分的なフランチャイズのようなことは想定していないのか。

例えば、年間の枠組みの中で、NHK ホールとして活動してもらう。その分、NHK に金を出してもらう。そんなことは議論しているのか。

【事務局】

その辺の運営の仕方については、これから形にしていかなければならない。

【伏島委員長】

複合施設のハード的なものは、再開発事業なので、これからの近いことだ。

その中では札幌市は構成員の 1 人にすぎない。逆に言えば、民間施設は、入りやすいホテルにして欲しいとか、ホテルのエントランスはめっちゃめっちゃ安い、権威あるギャラリーになるとか、そのような話を民間資本側に投げることもできる。複合施設全体を考えるとそのようなことも言える。

それと、金沢 21 世紀美術館など、日本の中だけでも素晴らしい施設はいっぱいあるので、いいところ取りができると思う。

ハード面についても考えて行きたいと思う。

今日は、税金をどう使うかというアートカウンシルの機能について、もっと本源的なことを考える必要があるという斎藤さんの議論から出発して、あれこれ議論があった。東京都と違う点もあれば同じこともあるので、テーブルの上には PMF も乗れば、オペラ祭も乗るというように、いかに札幌らしく大小を問わず丁寧にやっていくか、そういうやり方もあると思う。そして、市長部局と教育委員会部局をガラガラポンのようにやってもよいと思う。

たまたま、北海道文化財団は、知事部局と教育委員会部局の共管となっている。

共管にしなくてもよいわけで、教育委員会部局と市長部局の上に、アーツカウンシル的なものを持てば、それは全く新しい札幌スタイルだ。

【伊藤副委員長】

ちょっと一つ聞きたいのは、斎藤さんが、札幌市から演劇のセンターとか財団をつくれ、3億円つけるのでと言われたらどうするか。

【斎藤委員】

急にですか。

【伊藤副委員長】

なぜかというと、次の段階でおそらく考えなければならないのは、誰が、例えばアートセンターとか、アーツカウンシルとかの現場を最終的に回すのかということが大きい。

今度のアートセンターは、「文化」をアートボランティアとかアートソムリエの人とか、アーティストでない人たちに回してもらったり、応援してもらうということが前提で、出来ている。が、そのスペシャリストがいるのかということだ。

現在のアートマネジメント事例の多くは、状況があまりに貧しいので、作家や役者、演出家が自助努力でやっている。あちこちからお金をもらった

り、自腹だったり。それで倒産しちゃった人もいる。アーティストの人たちが、必要だからお金を回している。

「アーツ千代田 3331」の中村政人は芸大の油彩の准教授で、現代美術の作家だ。彼が回している。3331 の「かえるステーション」や、その前身である博多のプロジェクトや施設は、十和田現代美術館の副館長になった、現代美術作家の藤浩志さんが回している。近年、行政系の芸術・地域再生事例としてよく語られる、横浜市の黄金町エリアマネジメントセンターを回している山野真悟さんも、もともとは作家だった。

例として出てくる成功例は、結局のところ、作家の人がやっていて、その人の信念とテイストと見識と責任で回しているパターンがほとんどだ。個人商店だ。最終的な「システム」としては、それは余り良いことだとは思っていない。回すプロフェッショナルな人たちがいるべきだと思っている。それがベストなのだが、例として出てくるのは、個人の人がやっているところだ。

札幌のアートセンターとして話し合われていることは、合議制だったり、寄り合いだったり、あるいは若い人たちのアートマネージャーを育てると総花的なものになっており、方向が分裂している印象がある。きれいな「ストーリー」としては、作家も市民もマネージメントする人も皆で…ということでは総論は結構なのだが、実務のところでは、札幌方式の「質」が変わって来るような気がする。市としては、いろいろなことに対応できる「システム」を形を作りたいと思うけれども、市役所の職員が専門家だというわけではないから、それをどう回していくかということについては、自分たちが関与するわけではない。管理はできるが、中味の部分は、依然として誰が行うのかという点が宙に浮かんでいる。

【事務局】

行政自体がやるよりも、専門家が企画に携わった方がよいというところから出てきているのが、アートセンターであったり、アーツカウンシルであったりということなのではないかと思う。

コンサルティングサポートのアートコンサルティングの運営は、アーティストかもしれないし、アートマネージャーかもしれないが、それが相談に乗って、サポートしていく機能を果たしていければ一番良いのかなと思う。

【伊藤副委員長】

今までは、作家がNPOをつくったり、組織をつくって自分でやってきた。今度は、アートセンターを回すのは、アーティストが回すのか、アートマネジメントを勉強しているような学生が行うのかは、見えていない。出てくる

成功例は、アーティストが行っているものばかりなので。そのノウハウを、市はどう学べるのか。

【伏島副委員長】

アートセンターのしくみや機構をデッサンしていくことは、難しいのだが、さらに、伊藤副委員長がおっしゃったように、キャスティングだ。このキャスティングをどこかでやらなければならない。そこに、芸術系の人が芸術監督的に入るのか。全くアートのことは知らないが、辣腕家をビジネス界からヘッドハンティングするのか、そんなことを含めて、人事に関するコンサルも必要になってくる。

【事務局】

アートのことは全然知らない、経営の人がやるのは適当なのだろうか。

【伏島委員長】

選択のしかただ。

【伊藤副委員長】

東京都写真美術館の初代館長は写真家の渡辺義雄さんだったが、石原都知事になって、ジブリの創始者である徳間書店の徳間康快社長を入れて、金を儲けろとなった。世界に冠たる映像機器コレクションの常設展示があったのだが、それを引っ込め、収益性の高い映画上映や貸し館を加えた。それでも黒字になったので、それは考え方、決め方だ。現在の館長は資生堂の福原義春名誉会長だ。

【事務局】

やはりアートの世界は、アーティストがマネジメントもやっているというように、アートの世界を知らなければできないということもあるのではないかな。

【伊藤副委員長】

誰もやらなければ、しょうがなくてやっているということだ。

【伏島委員長】

今、かなり流動的だ。

トヨタのアートマネジメントで頑張ってきた人を3年契約でヘッドハンテ

イングしてくるとか。あるいは、メセナの担当者を引っ張って来るとか、いろいろな考え方はあるので、頭を柔らかくして考えて良いと思う。

それが札幌方式だと思う。業界のしがらみもないし。

【本家委員】

さきほど野田さんがおっしゃったように、敷居が低いというか、入りやすいと良い。街中にどうせつくるのなら、待ち合わせ場所に使ってほしい。そこから始めても良いのではないか。彫刻を置いてみたり、大きなビジョンを置いたり、あそこで待ち合わせねという感じで、若い子、カップル、家族連れに近くなれば、ちょっと時間があるから中に入ってみようかとなる。御茶でも飲むとなる。そこに絵があったり、映像があったり、演劇やっていたりというのが良い。

そういう街になっていけばよいかな。

【伏島委員長】

冬こそ、ここが格好良い場所になればよい。

【本家委員】

北海道の冬は、外へ出ない。冬こそ、レジャースポーツのような感覚で、利用してもらえたらよい。

芸術の森は、車がないとちょっと行くのが大変。特に冬は、余り機能していない。野外美術館も閉まっている。そういうときこそ、地下鉄一本で行けるアートセンターが魅力ある。

【伏島委員長】

この冬、彫刻美術館で、雪を使った彫刻展を行った。その学芸員さんとも話したのだが、できれば街のまん中でやりたい。それをライティングしたらものすごく格好良い。子どもたちの写真コンテストを行っても良い。

【田中委員】

冬芸術の森へ行ったときには、数えるしか人がいないので、ちょっともったいない。さきほどのアーツ千代田のように公園になっていれば、そこで雪だるまをつくってもよい。そのコンテストを行っても良い。もっと自由な感じで参加出来れば良いなと思った。

【伏島委員長】

傍聴者のみなさまに、御感想をうかがいたい。

【傍聴者】

独立行政法人国際交流基金に勤めていて、現在ソウルにいる。また、東京の大学で文化政策を研究している。

今回の議論は、おそらく三つに集約される。①人をどうするか、②金をどうするか、③場所をどうするかだ。

まだ、ソウルに来て2カ月なのだが、ソウルと北海道がこんなに近いと思っていなかった。今回も2時間半で、格安の航空券で来た。

今後の札幌の文化政策を考えると、韓国や台湾や中国の人たちは、絶対巻き込むべきだ。観光との良いコラボレーションができるということは非常に大きいと思う。それに何が重要かということ、言葉だ。韓国や中国では、日本語で話しかけてくるが、日本へ来ると、韓国語や中国語できちっと対応してくれる人はいない。今からでも、教育大や北大の人たちに市がお金を出してもよいので、語学をきちっと勉強させるということが非常に大きいと思う。それで、いったんどこかの会社に就職しても良いと思う。そこで、文化のことをやりたければ、こちらへ戻って来るようなシステムをつくるということは、非常に大きいことだと思う。そのような種まきを今からしていくことが大切だと思った。

国際交流基金では、舞台芸術の分野で助成金を出す方の立場にいた。お金を出す時に、アウトソーシングというお話しがあったが、その人は文化芸術のことを分かっているなければならない。上の人は知らなくてもよいとか、そういう問題ではなくて、全体は芸術のことについてしっかりと分かっていると、そこに、どういった形で誰がお金を出すかということが分からなくなると、それこそわからなくなる。要するに、可視化をすることが非常に大きいことだと思うが、それにはアートのことから分かなければならない。かといって、アートについてだけ分かっているといけぬ。さきほどの、観光や札幌全体のことも分かっている、それでアーツカウンシルで何かをするといったときに、論理的に落とし込んでいける人が絶対に必要だ。という意味で、札幌は札幌の人材を自分たちで作っていかなければならない。

さきほどの、観光の話と関わるのだが、場所の問題は大きくて、場所は良いところになければいけない。東京の現代美術館は本当に遠いところにあるし、札幌芸術の森も非常に良いところだとは思いますが、冬場でも、普通でも車がないと不便なのだが。そのときに、観光の問題と結びついていて、行けるようなところにつくる。ただ、人がいるようなところにつくるということではなくて、今後行ってもらいたいところ、ちょっとはずれたところを作る

ことも大事なのではないかと思う。

夏に札幌に帰ってきたのは 10 年ぶりくらいなのだが、大通にあんなに人がいないとは思ってなくて、ショックを受けた。でも、私の青春時代は大通りにあったわけで、それを考えるともう一度大通りに人を戻す、市の全体の方策の中で、例えばアートのものは、大通りにつくって、商業的なものは札幌駅の方へつくる。アートのものはちょっとはずして西 11 丁目につくるとか、全体の中で考えていただいた方が良い。

アートだけを考えていると、札幌方式は難しい。逆に、そういったものを落とし込んでいくことによって、札幌には魅力が生まれてくると思う。

演劇の話で、東京で働いていたときに、ある方が、それは、劇場の方で審査員としていらした方なのだが、札幌の演劇祭を観に来て、こんなにレベルが高いとは思わなかった。東京なんか比喩ものにならないと、手放して驚いていらした。札幌は余りレベルが高くない、東京に比べてレベルが高くないということは、まず考えない方が良くと思う。自分たちのやりたいことをしっかりやるために、どういうシステムを組んでいくのかということと、あと、東京を見ないで、国際的な形にしていくべきだ。方向はアジアを考えて行くべきではないかと思う。

【傍聴者】

そもそも、このような話し合いの場があることを知らなかったのも、興味深かった。今後予定されているアートセンターのことについて、そのようなものが作られると言うことは喜ばしいことだと思っているのだが、そもそもアートセンターがあるべきなのかということがある。市民から要望が上がって作ろうとしているのか、それとも、それがあった方が、札幌ひいては北海道の文化芸術が発展していくと思うし、あるべきだから作っていくのか、作って良いものだという意見にしていくことも含めてつくっていくのか、どう違うのかなと思った。普段、まったく芸術文化に関係の無い人にとっては、アートセンターを見たときに、カフェとか図書館があれば良いとは思う。定着しなくてはならないのは、そこで何をするかというソフトであろう。それがすごく重要で、多分平行して考えているとは思いますが、そのようなお話も聞けたらおもしろかったと思った。

【伏島委員長】

アートセンターについては、15 年くらい前から議論があるので、つつい、当たり前になってしまっている部分があるので、今のお話はすごく大事だ。

アートセンターはいるのかということも絶えず検証していかなければなら

ない。時間も少しオーバーしたので、今日はこれで終わりたい。